

汚染処理水

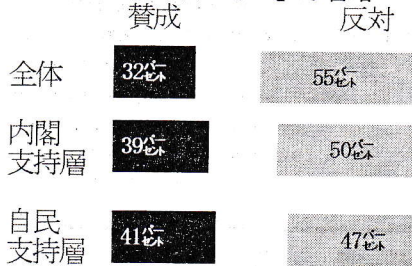
# 海洋放出反対55割 風評被害に不安86割

「朝日」世論調査

福島第一原発の敷地内に貯蔵される放射能汚染水の処理水の処理について、政府は海洋放出を検討している。朝日新聞(1月4日付)の世論調査(郵送)の結果によれば、「汚染された水から大半の放射性物質を取り除き、国の基準以下に薄めた処理水を海に流す」ことへの賛否は、「賛成」32割にとどまり、「反対」55割だった。内閣支持層でも50割、自民支持層でも47割が

## <処理水 海洋放出の賛否>

「その他」「答えない」は省略



「反対」し、いずれも「賛成」を上回った。男性は「賛成」44割、「反対」46割に割れたが、女性は「賛成」22割、「反対」62割と大きく開いた。海洋放出による水産物へ

の風評被害への不安は「大いに」42割、「ある程度」44割と、合わせて86割が「感じる」。「感じない」は「あまり」9割、「全く」2割、合わせて11割だった。海洋放出には賛成の人でも風評不安は68割が「感じる」と答えた。

福島第一原発事故に対するこれまでの政府対応への評価も聞いた。「評価しない」67割、「評価する」20割。自民党支持層でも56割が「評価しない」と答えた。政府対応を「評価しない」人は処理水の海洋放出に64割が「反対」と答え、全体より「反対」が多かった。政府基本方針の原案には、最初は環境影響を確認しながら少量で流すことや、被害が生じた場合は東電に賠償させることなどを盛り込んでいる。梶山弘志経産相は「いつまでも方針を決め

ずに先送りできない」と繰り返している。もともと汚染水対策は、大型タンク貯蔵で臨むべきものを、場当たりに小型タンクで対処したのが誤りの始まり。今になってタンク貯蔵は限界にきたから海洋放出とは被災地に対する二重の誤りである。大型タンクで対応しておれば何の問題もない。今からでも遅くはない。

福島第一原発事故の翌年の2012年春、石川県の原発問題住民運動団体からの求めに応じて、能登半島中部にある北陸電力「志賀原発(石川県志賀町)周辺の地質を調べる機会を得た。地元では、原発の北方を東北東から流下する富来川に沿って推定されていた断層が活断層か否かが重要な問題になっていた。

当初は、周辺に分布する段丘堆積物をボーリング掘削し、その年代や高度を比較することで活動性を議論できると考え、多くの地元の方の参加の下に、ハンドボーリングや機械ボーリングで試料採取を試みた。しかし、この方法は富

来川の左岸で、掘ってすぐに中新世の火山岩類にぶち当たって頓挫する。基本に立ち返って、地道に周辺の地質調査から始めた矢先、段丘面から海岸に降りる道路沿いで、段丘堆積物が見

物であった。その後、毎年3、4回現地に出かけて、地元の人たちと海岸に広がる波食棚や海食崖に見られる断層やノッチの測量・記載に取り組んだ。調査データをもとに活断層

### 志賀原発活断層問題研究グループ論文にたいする「地球科学賞」を受賞して

原住連・幹事代表委員 立石雅昭

つかった。同様な路頭が周辺にないか、調べてもらったところ、観光地の駐車場を広げる際にできた崖があるとの情報寄せられ、調査に出かけたところ、典型的な海成堆積

研究グループとして論文を書き出した。初稿(2017年4月)は査読を受けた結果、多くの不備を指摘された。しかし、地元の人たちの熱い思いを無駄にはできない。何回か編集

論文は19年10月、「地球科学」に掲載された。このほど、この論文が「地球科学賞」を受賞。私としても初めてのノッチやヤッコカンザシ化石の高度分布が、最近の地殻変動とかわかることを学んだ。

原発再稼働を阻止するたにかいに、少しでも貢献できる成果を得ることができたと思えば、何より地元の方々の熱意のたまものである。これからも、地元の人びととともに、「現地で」を motto に原発周辺の地質調査に関わっていききたい。